

# 宗教と国際政治

池内 恵

Ikeuchi Satoshi

## 1 「対テロ戦争」の時代に

「宗教と国際政治」というテーマは、国際関係論・国際政治学の研究において、現在最も高く関心が寄せられている分野と言っていい。国際関係をめぐる専門研究の場において、宗教は重要でありながらこれまでに十分に組み込まれてこなかったテーマの筆頭として、定期的に関心の的として浮上する。専門業界の内側での関心以上に、一般社会において宗教と国際政治の関係に向ける関心の度合いは高まっているだろう。それも当然である。

現在の国際政治は、遠い将来のある時点から巨視的に振り返って歴史として記述するならば、「9・11以後」という時代に区分されることになるだろう。2001年9月11日の米同時多発テロ事件が、イスラーム教に立脚する世界観とイデオロギーに動機づけられ、方向づけられたものであったことを否定する者は多くないだろう。9・11事件への反応として、米国は「イスラーム過激派に対するグローバルな対テロ戦争」を主導して展開し、国際社会に追随を求めた。その一環として米国によるアフガニスタンへの軍事介入やイラク戦争が行なわれたことは、そのような米国の意思決定にキリスト教がどのような影響をどの程度及ぼしたかについての議論はともかく、唯一の超大国の外交・安全保障政策の主要課題として、宗教が大きく関わった「国際テロリズム」およびそれに対する「対テロ戦争」が提起され実際に実施され、本稿を執筆する2018年9月までに17年という月日が経過しているということは確固たる事実である。「対テロ戦争」がすでに短いながらひとつの「時代」と形容することが可能なほどの時間と事実の積み重ねを経てきたことに、改めて注目すべき時期に立ち至っているだろう。

「対テロ戦争」の時代とは何だったのか、そこにおける宗教をどう捉えればいいのかという課題を軸にして国際関係史を再構成し、国際関係論・国際政治学の方法論と視野の再検討を行なうことは、専門家としての職業人生の過半あるいは大半を何らかの意味でこの対テロ戦争との関わりで過ごしてしまった世代の研究者・実務家の双方

にとって、有益なことと思われる。

## 2 「宗教の復活」と世俗主義の再検討

現代の社会を対象とした社会科学の多くの分野においては、その分野と宗教との関わりをどう捉えるか、あるいはどう捉え直すかについてはすでに長く議論が行なわれてきている。すなわち宗教の重要性の再確認と再評価の作業は、社会科学の諸分野においてすでにながかりの期間にわたって高い関心を受けて行なわれ、それぞれの分野の主要課題と化しているという面がある。国際関係論や国際政治学の分野でもそれは例外ではない。しかし他の分野に比べて若干の反応の遅さと、一定の躊躇があったことは否めないだろう。

19世紀における近代の社会科学の体系化・総合の時期において（この時期の社会科学の全体像は「マルクス・ヴェーバー・フロイト」のいわば「三幅対」のような典拠的テキスト群をイメージしていただけるといい）、世俗化は人類の進歩の不可避の過程として、一方向的で不可逆なものであるかのようにみられていた。第2次世界大戦後に、米欧を一方の軸に、ソ連を他方の軸にした東西冷戦構造のなかでも、世俗主義は両陣営が普遍的なものとして掲げるイデオロギーに共通した基盤のひとつであった。宗教を「阿片」として論難した共産主義に基づく東側陣営はもちろんのこと、西側陣営が依拠した近代化論的な社会科学の発展とそれに支えられた内政・外交・安全保障の政策論においても、リベラリズムと分かちがたく結びついた世俗主義は支配的な認識枠組みであり、暗黙のうちに、あるいは明示的に政策的指針の柱になっていた。近代化論的な社会科学においては、世界の脱魔術化、宗教の公的な領域からの排除と「私事」化、「聖なるもの」の喪失は不可避と捉えられた。

西欧を起源とする近代化が前提とし、東西陣営を横断して支配的な認識の枠組みであり将来への指針であった世俗主義に対する挑戦が表面化し、広く論じられるようになったのは1970年代の後半から末にかけてだろう。近代化論とイデオロギーの終焉論を先導したダニエル・ベルは、1976年にいち早く近代化の行き着くところにおける聖なるものの復活を予告した<sup>①</sup>。この予見は、一方で1970年代末のイラン革命によってイスラーム世界から、他方で福音主義派・宗教右派の政治的な台頭という現象によって近代化の中心的推進勢力としての米国から、裏づけられることになった。

1980年代に、世界各地での宗教の影響力の復活は、目を背けようのない事実としてメディア報道でも社会科学でも認識され、検討の対象とされるようになった。それらの現象は、アフガニスタンへのムジャーヒディーン（ジハード戦士）勢力の結集を米国が支援したように、あるいは共産主義陣営への文化的対抗軸あるいは浸透の経路としてカトリックを中心とした教会の役割が注目されたように、国際政治のなかで、（西側にとって）必ずしも否定的な文脈でのみ捉えられていたわけではない。しかし、プ

ロテスタントを中心としたキリスト教あるいはその影響を受けた新興宗教の一部に根強くみられた「カルト」化の現象や、イスラーム主義の内的・外的要因による過激化と「原理主義」化の現象は、メディア報道や社会科学的な検討においては、当初はあくまでも近代化の不可避的・不可逆的な進行から逸脱した、近代化に対する反発や一時的反動として捉えられる傾向が根強かった。

ところが1980年代から1990年代にかけて、社会の広範な部分における宗教信仰への回帰が持続的に観察され、そこから宗教の公的・政治的な領域への影響力の復活が一時的ではないものとして認識されて、社会科学の研究の、あるいはメディア上の活発な議論の対象として華々しく提起され、定着していく<sup>(2)</sup>。世俗主義の普遍性が再検討され、あるいは場合によっては疑義をもって再検証されるようになった。世俗主義は西洋近代に固有の現象として相対化の対象となり<sup>(3)</sup>、世俗化を普遍的で不可逆的な歴史の過程として前提にすることはできず、むしろ脱世俗化<sup>(4)</sup>の過程が進行していることが指摘されるようになった。世俗化と脱世俗化は同時並行的に錯綜して生じている現象として捉え直され、世俗化を軸とした近代化の推進勢力とみられてきた欧米の歴史と現在においてさえ、聖なるものと俗なるものの峻別や、公的領域と宗教的領域の分化が必ずしも截然としたものではないことが指摘されるようになっていった<sup>(5)</sup>。一般書で「神の復活」がやや扇情的にすら語られるようになり<sup>(6)</sup>、世俗主義に対する宗教の勝利すらも語られるようになった<sup>(7)</sup>。

### 3 国際関係論・国際政治学と宗教

この知的・メディア的潮流と国際関係論・国際政治学が無縁であったかということ、もちろんそうではない。2010年代初頭には、国際関係論・国際政治学の分野における宗教をめぐる議論の積み重ねが回顧され、その成果と今後の課題がまとめられる程度には、「宗教と政治」をめぐる検討は進んできた<sup>(8)</sup>。

ただ、国際関係論・国際政治学が他の社会科学の諸分野と比べて若干、宗教の台頭や復活という現象を「ことば賀ぐ」ことに躊躇があったとすれば、それはいくつかの要因によるだろう。ひとつは、そもそも国際関係論・国際政治学の方法論に関する批判でしばしば言及されるように、「国」際関係および「国」際政治という枠組みが原則として近代国家を主要な行為者とみなしていることだろう。その近代国家の理念と現実の構成は、基本的に世俗主義の理念に依拠して成立してきたものであり、国際関係・国際政治の基本単位としての国家の世俗性を再検討するためには、社会諸科学による批判的検討の進展を待たねばならなかった。

同時に、国際政治学はそもそも研究対象における宗教の重要性を見落とすことなどありえなかったとも言える。冷戦後の民族対立・地域紛争に宗教の要因が介在していることは否定しがたく、グローバル化の進展において活発な推進役となったのは宗教

組織・団体であり、その護持する理念もまたグローバル化によって広まったものであったことも言うまでもない。見る側によほどのことがない限り、それらの現象を見落とすことはありえなかつただろう。

世俗主義に対する宗教の台頭とその現在あるいは近い将来の「勝利」をめぐる議論の提起は、西洋近代および欧米主導の国際政治秩序において前提となっている、世俗主義を暗黙の中核的原理のひとつとするリベラリズムの価値規範そのものが、批判と再検討の対象となっていることと表裏一体である。このことは国際関係論・国際政治学に携わる者たちに、宗教をめぐる問題を対象化し、その理論への統合をはかることを躊躇させる一因となつたかもしれない。宗教を対象とすることは、国際関係論・国際政治学の既存の理論的前提を是認するか否かの問いへの返答を迫る、しばしばイデオロギー的で党派的な問いかけとなりかねず、学的世界のさらに外側の、既存の支配的秩序への挑戦の是非に一足飛びに関係づけられかねないものであつた。そうであれば、基本的には依然として国家を最有力の基本単位とする国際社会を対象とする学問において、安易に宗教を課題設定に取り入れることが回避されたのも、自然なことだろう。

「アラブの春」がリベラル・デモクラシーを中東にも及ぼすという、かつて冷戦終結時にフランシス・フクヤマが「歴史の終焉」論で主張したような展開が現実化することへの期待は、数年間で打ち砕かれた。しかし、宗派主義や部族主義、地域主義などによるイスラーム世界の内部対立・分裂が表面化しているように、イスラーム世界が一丸となって西欧キリスト教世界に挑戦するというハンチントン流の「文明の衝突論」もまた現実的ではないことが明らかになっている。「イスラーム国」によるイラクとシリアでの領域支配は、各地で一定数の散発的な呼応を呼び覚ましたものの、グローバルな包囲網の形成をもたらさず、早期に挫折した。

「アラブの春」後の7年間の展開によって、宗教・宗派による政治的アイデンティティーの持続や再強化、教義に基づいたイデオロギーによる動員の有効性が明らかになり、宗教の国際政治における重要性は自明とされつつある。同時に、宗教の教義やアイデンティティーを、国際政治の現実の政策としても、あるいは学問的なパラダイムとしても、普遍的なオルターナティブとして安易に想定することができないことは、明らかになってきている。国際政治においては、世俗主義の普遍的妥当性・適用可能性には大いなる疑念が付されるにしても、世俗主義的な近代国家の有用性、あるいは希少性はむしろ再評価され、いかにして適切に、有効な国家を形成するかが、中東を舞台に、検討の対象とされる段階だろう。「アラブの春」による独裁的政権の揺らぎによって限定的に開かれた政治的自由の空間・時間に民主的な方法で台頭したムスリム同胞団は、世俗主義と不可分に結びついたりベラリズムに対する十分な顧慮の姿勢を示さなかつた。しかしムスリム同胞団の台頭を各地で阻止した軍とそれを支持

する勢力は、世俗主義とリベラリズムを非民主的な手段で強制するという、矛盾した姿勢を示している。中東諸国の市民は、あるいは中東に関与する各国は、「非自由主義的な民主主義」か、「非民主主義的な自由主義」かを選ぶという、究極の選択を迫られており、当面はどちらの選択も必ずしも市民に平和や安全な生活をもたらしてくれないという苦境に置かれている。これは宗教と国際政治の関係に根幹で根ざした対立と矛盾が生んだ苦境だろう。

- (1) Daniel Bell, *The Cultural Contradictions of Capitalism*, Basic Books, 1976; ダニエル・ベル (林雄二郎訳) 『資本主義の文化的矛盾』、講談社、1976年。約20年後のベルの認識は、Daniel Bell, “The Return of the Sacred? The Argument on the Future of Religion,” *British Journal of Sociology*, Vol. 28, No. 4 (1997) に示されている。
- (2) Rodney Stark and William S. Bainbridge, *The Future of Religion: Secularization, Revival, and Cult Formation*, University of California Press, 1985.
- (3) Talal Asad, *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*, Stanford University Press, 2003; Charles Taylor, *A Secular Age*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2007; Andrew Copson, *Secularism: Politics, Religion, and Freedom*, Oxford University Press, 2017.
- (4) Peter L. Berger, ed., *The Desecularization of the World: Resurgent Religion and World Politics*, Eerdmans, 1999.
- (5) José Casanova, *Public Religions in the Modern World*, The University of Chicago Press, 1994.
- (6) John Micklethwait and Adrian Wooldridge, *God Is Back: How the Global Revival of Faith Is Changing the World*, Penguin Press, 2009.
- (7) Rodney Stark, *The Triumph of Faith: Why the World Is More Religious than Ever*, Intercollegiate Studies Institute, 2015.
- (8) Jack Snyder, ed., *Religion and International Relations Theory*, Columbia University Press, 2011; Monica Duffy Toft, Daniel Philpott and Timothy Samuel Shah, *God’s Century: Resurgent Religion and Global Politics*, W. W. Norton, 2011; Pippa Norris and Ronald Inglehart, *Sacred and Secular: Religion and Politics Worldwide*, Cambridge University Press, 2011.

---

いけうち・さとし 東京大学准教授  
<http://ikeuchisatoshi.com>